

ホンマニ荒れたで大阪場所 えらいこっちゃ
平成26年春場所観戦を振り返って

昔から「荒れる春場所」と言われ、横綱以外が優勝することが多いとされていたが、まさにそのとおり。「白鵬が全勝優勝」、「鶴竜は並走して13勝2敗で白鵬に次ぐ成績」と読んでいたが、見事に外れてしまった。ほぼ予想通りの結果となったのは遠藤の出来栄えだけだった。優勝した鶴竜以外の大関は怪我によるものと言ってしまえばそれまでではあるが、稀勢の里9勝6敗、琴奨菊8勝7敗というありさま。「大関は二場所連続して負け越さなければ陥落しない」という優遇措置がされている「特権階級（幹部）」であることを考慮すると、「これでいいのかい？」と言わなければならない。

<1> 優勝の行方そして・・・

腰の備えが万全で素早い身のこなし、土俵に上がった時から「相手を捉えて動かない眼」、誰もが白鵬の全勝優勝を予感したに違いない。

筋書きを狂わせるきっかけになったのは琴奨菊戦だった。「手負いの大関を甘く見た立ち合い」と私は読みとった。白鵬にも油断はあったに違いないが、思いもかけぬ「琴奨菊の変身ぶり」がこんな結末を生んだ。また、土俵際に発生した白鵬の怪我が翌日から千秋楽までの土俵に大きく影響したと言える。

土俵から転げ落ちた力士達は、「観客に怪我をさせないような転落のしかた」を求められている。おまけに最前列にはカメラを構えた取材陣も陣取っている。観客側も体をかかわさなければならないが、力士はそれ以上の速度で瞬時に判断して手をついたり体を曲げたり観客席の間を飛び抜けたりすることになり、それが元で怪我をする力士は少なくない。最前列は審判席だけにして二列目以後をあと1mほど下げ、取材席・観客席にすることでこういった事故は防止できると思うのだが。

鶴竜の相撲は、前半はいなしを交えたものが目立ったが、中盤以降は「突き押しを交えた鋭い攻め」と「前みつ取り」による早い寄り身が目立ち、尻上がりに好調になってきた。14勝1敗の優勝は褒め称えるべき結果であり、先場所の準優勝の成績も合わせると立派な出来栄えではあるが、「白鵬が琴奨菊戦で怪我をしていなかったら・・・？」と考えると複雑な心境である。もうひとつ冷静に眺めると、「直前六場所の成績」と「大関在位中の実績」をつぶさに眺めると「急いで横綱に推して大丈夫なの？」という気がする。日馬富士の例も見るように、騒ぎ立てて昇進させた人達が「梯子外し」に走る結果とならないことを祈るしかない。何事にも巧遅と拙速との対比をした評論はあるものだが、それ以上に「地位が人を作る」ということを願うしかない。

<2> 豪栄道と栃煌山

豪栄道は叩いたり逃げたり「下がりながらの相撲」の悪い癖が消えて、特に中盤以後は立ち合いの鋭さも加わり「攻めの相撲」を感じさせた。これで生まれ変わったのか、それとも「ご当地力士」ゆえの踏ん張りだけだったのか？松鳳山とともに「勝負師の顔」をしている数少ない力士の一人なので期待したいところだが、来場所の結果を見ないとまだわからない。

「春日野部屋（栃）の煌めき」という四股名を持つ栃煌山、相変わらずの勝ち越すのがやっという状態。「次の大関候補」と言われて幾久しいが、その間に何人もの力士が通過して行った感じがする。両差しになった時には強いが、そうでない時にはコロコロ・バタバタ。エレベーター関脇のままでは「名関脇」の称号すら手に入れることは難しい。相撲のスタイルとして何か研究が足りないのではないかと思うが、如何か。関脇・小結の座を狙う若手力士達の中に次の世代をうかがう者が見え始めて来た。豪栄道ももたもたしてはられない。

<3> 次を狙う若手力士たち

若手力士の登場が顕著になって来た。今場所は特にその動きを感じることができる場所だった。

遠藤は幕下 15 枚目格付出でスタートした。柔らかい体と身に付いた基本技術でここまで順調に上がって来たが、私は 5 勝 10 敗程度で跳ね返されるだろうと予想した。結果はほぼ的中し、6 勝 9 敗。立ち合いに相手の前みつを狙う低い姿勢は今後磨きこむと強い武器になることだろう。しかしながら、猛烈な勢いで突っ込んでくる力士に、矢継ぎ早の突き押しで迫られると後退してしまうという欠点が明らかになった。まだチャンコの味が染みついてはいないということだろう。学習能力は高そうなので、次の場所が楽しみである。年内には三役の一角に入れそうな気がする。

千代鳳と千代丸が兄弟で入幕してきたことで、マスコミから見れば「新しい話題ができた」という感じだ。二人の星取表の展開が酷似しているのが興味深い。兄が勝てば弟も勝ち、兄が負ければ弟も負けていて、一卵性双生児でもないのに日々の勝ち負けのパターンが同じで面白い。先に入幕した弟の千代鳳は、元気な前進相撲で、しかも流れに応じて機敏に色々な技を切り出すところが若々しいだけでなく、何かを期待できそうな気がする。時間一杯の仕切りでの腰の割り方が不足なのと、いつまでも手をつかないのは今後の為にならないので、早いうちに改善しておいた方が良い。兄の千代丸の相撲の方が素直で真面目な部分が多いが、いずれにせよ、二人とも相当量の稽古が裏打ちになっているのだろうと見ている。千代鳳は立ち合いの是正が出来れば三役入りも可能な感じがしている。この二人の活躍を見ていると、若手力士達がお互いに磨き合いながら競り合っている九重部屋の様子が伺える。

エジプトから来たということで話題の中心に躍り出た大砂嵐は、周囲に相撲を覚えられた感がある。腰高で相手のまわしを上から取る型は危険。やたらに張る張り手は脇の甘さを露呈するので止めて、正面からの突き押しに徹するべきだと思う。師匠がこのあたりの基本を厳しく指導していかないと、琴欧洲・把瑠都・黒海の二の舞になりかねない。

貴ノ岩は、十両時代にどうしても 7 勝 8 敗以上の星が上げられず、何回か新入幕の機会を逃してきた。辛うじて入幕できた先場所も同様の結果となった。あの惚れ惚れするような体で、立ち合いに踏みこみもなく、後退しながら繰り出す技で凌ぐのが彼の相撲っぷりだったので、あまり期待はしていなかった。ところがどっこい、今場所は鋭い立ち合いの踏みこみと、突き押しあり寄り身ありでしかも素早く動きながら反応して行く相撲に変わってしまった。こうなれば立派な体が活きるのだから、上位にも充分に通じるに違いない。もし今場所限りのブロックでないことを祈りたい。

奈良県出身で近畿大学相撲部出身の徳勝龍は、豊富な稽古の成果が出ており前に落ちにくい。きれいな立ち合いと低い位置から重心をかけての攻めは力強さがある。叩きや下がりながらの取り口がないのが気持ち良い。顔が千代鳳に良く似ていて（実弟の千代丸以上に）紛らわしい。

壁に当たったまま破り切ることができない高安、目下壁を少しずつ切り開かんとしている勢、怪我で陥落して足踏み気味の妙義龍、もたもたしていると追い越されるかもしれない。面白くなってきた。

<4> 活躍したベテラン力士

嘉風（場所中に 32 歳になった）がきびきびした動きで休むことなく動き回り 10 勝 5 敗の成績をあげた。若い頃には無駄な動きを沢山しすぎて、自分が疲れて敗退するパターンが多かったが、無駄な動きがなくなって理詰めの動きが多くなったことで、勝ち星に繋がるようになった。敢闘賞受賞は妥当な選だろう。東前頭四枚目でのこの成績は、来場所の新小結への昇進もかなり濃厚。

同じ部屋の豪風も豆狸のような小さな体で突き押しを中心に館内を湧かせて 9 勝 6 敗。旭天鵬（39 歳）・安美錦（35 歳）などベテラン力士が良い動きをして、勝ち越しをしていた。

それとは対照的な出来事として、琴欧洲が引退を発表したが、年齢はまだ 31 歳だった。

<5> 十両の相撲から

豊真将が全勝優勝かと思ったが、千秋楽に大道に敗れて果たせなかった。全盛期の動きが蘇った感じで、幕内に復帰するであろう来場所の活躍が期待できる。

37歳の若の里は十両に陥落して三場所目、9勝6敗の成績をあげて、少しずつ再入幕が近付いてきた。幕内から陥落したベテラン力士が十両でも活躍しているのは素晴らしいことではあるが……。

十両力士の内70～80%は幕内経験者だろうと思う。そういう環境の中で、幕下から新しく上がって来る若い力士達はいくつもの壁を乗り越えて行かなければならない。これはこれで大変なことだろうと思う。

ここ数年、新しい顔ぶれが壁を乗り越えて入幕して来ているのは楽しみなことである。次の時代をうかがう力士がいるかどうかは、十両の土俵を見ているとよくわかる。

<6> 北の富士のひとこと

千秋楽の結びの一番が終わり表彰式も進んで行く最中、NHKの相撲解説の北の富士が思わず漏らした一言。「鶴竜の横綱昇進は、(もし実現するとしたら)まさに本人の努力の積み上げによるもので、祝福に値する。来場所からのさらなる活躍を期待したい。しかしながら、三横綱はすべてモンゴル出身力士だ。モンゴル出身が悪い訳じゃないが、力士達を育てている親方たちはこれで良いと思っているのだろうか。日本人の力士も育てなくちゃいけない。国技であることを考えたら、これで良い訳がない。人材発掘・人材育成に一層の尽力をしてもらいたい。」

というような主旨の発言だった。

相撲協会が世界に向けて門戸を開いたことは良かったが、単に短期的な興業の面白さだけを追求するのではなく、国技としてのポジションも維持して行かなければいけない。しかも、日本の社会が抱える問題点である「少子化」、「汗をかかない仕事志向」、「コツコツ努力型人間の減少傾向」などが背景に潜む中で、大変重い内容の発言だったと思う。

以上